

## イギリス女性学の諸相（その1）

有 賀 美和子

### はじめに

マリリン・ボクサーによれば、女性学の発祥は1960年代後半、たとえば1966年のニューオーリンズ・フリースクールやシカゴ大学のフリーコースにおいてであったから<sup>1)</sup>、女性学の歴史は、かれこれ30年の歳月を経たことになる。女性学発祥の地であるアメリカと並んで、イギリスがその萌芽期から、女性学先進国の双壁をなしてきた。今やフェミニズムの古典となったベティ・フリーダンの『女らしさの神話』(*The Feminine Mystique*/邦題『新しい女性の創造』)<sup>2)</sup>が1963年にアメリカで出版された3年後の1966年、イギリスではジュリエット・ミッチェルが「女性—最も長きにわたる革命」というエッセイを著わし<sup>3)</sup>、イギリス女性学の先駆となった。しかしこの30年間、ある共通の女性学的視点からなされた各学問分野における新たな知見の蓄積が「女性学」と総称されてきたものの、個別研究の蓄積に比して、女性学総体としての時系列的な軌跡がいかなるものであったのかは、未だ必ずしも明らかではない。

殊にイギリスは、古くからアカデミズムの権威と伝統を誇り、各専門分野間の壁も厚いという学問的風土をもっている。その同国において、女性学進展の“サクセス・ストーリー”がどのように成立していったのだろうか。イギリス女性学の歩んだ軌跡を辿ることは、この30年の「女性学史」を振り返り、今後の展開への示唆を得るために、一つの有効なアングルであろうと思われる。

なお本稿では「女性学」を、今日における大方のコンセンサスに基づいて

「女性をめぐる差別・抑圧の原因とその構造を探り、それからの解放の見取図を理論化する試み」とおさえ、そうした解放をめざす思想と行動を広く「フェミニズム」と表わすことにしたい。したがって、各学問分野で展開された女性学を意味する場合、例えばフェミニスト歴史学、フェミニスト社会学という表記を用いることにする。

## 1. 揺籃期のイギリス女性学

イギリス女性学の第1期（1970年代前半）は、「性役割理論」ないし「社会化理論」隆盛期であったといえる。つまりそこでは、男女の生物学的性差（sex）に関連して「男らしさ」「女らしさ」という社会的・文化的に意味づけされた性別（gender）がつくられ、それに付随して「男は外に、女は内に」という性役割（gender role）が社会化<sup>4)</sup>されることによって、女性の公的領域への進出が阻まれていることが論じられた。

総じてこの時期の女性学では、既存の各学問領域における女性の不可視性に光をあて、その社会的存在様態の全容を照らし出すという共通目的のもとに、主として性役割や性別分業の社会化過程の解明がめざされたのである。例えばイギリスを代表するフェミニスト社会学者のアン・オークレーは、社会生活の諸領域で女性が実際に活動している度合を示す社会的顕在性（social presence）と、それらの各領域を研究対象とする社会学の諸分野で女性が研究対象として取りあげられている程度を示す社会学的可視性（sociological visibility）という二つの指標によって両者を比較し、社会学が女性の実態と経験の考究をいかに見過ごしてきたかを顧みている<sup>5)</sup>。こうした作業のなかで、性役割や性別分業の社会化過程が考究されるとともに、社会における性差別実態の分析や女性解放運動に関する研究が意欲的におこなわれ、女性の存在を書物のなかに顕在化させる試みが広く展開されたのであった。

ここで女性学は、生物学が男女間の心的特性や行動特性の分化を決定づけるとみなす“生物学的決定論”を基底とした従来の性役割理論の立場を離れて、性役割の分化を社会的・文化的文脈にそって解明する試みを開始したの

である。従ってそこでは、男女の特性の多くは性別に伴う社会的・文化的価値の学習結果であることが強調された。こうした新しい性役割理論への一つの契機となったのは、米国ジョンズ・ホプキンス大学で医師として両性具有者等の性的アイデンティティの研究に長く携わってきたジョン・マナーらによる一連の研究であった。そこで導き出された仮説は、子どもが自分の属する性を明確に意識し（性同一性の確立）、その性別にそった役割行動を受容すること（性役割同一性の獲得）は、性染色体や性ホルモン等の存在自体ではなく、両親を中心とする周囲の一貫した女兒または男児に対しての養育態度に基づくというものである。マナーらは、個人の内部に生物学的性とは正反対の性的アイデンティティが確立されることも少なくないことを指摘するとともに、一般に認められている両性間の差異のほとんどは、性別に従って便宜的に割当てられた役割規定であり、これらの規定自体は文化の歴史的所産なのであるとして、「解剖学は宿命である」(anatomy is destiny) という通念を明確に否定したのであった<sup>6)</sup>。

こうした仮説に導かれたフェミニスト社会学者の関心は、性役割を分化させていく社会化過程に向けられ、性役割研究においては、役割獲得のメカニズムや、役割の期待・認知・行動内容における性差や、家族・学校・仲間集団・マスメディアといった社会化のエージェントに関する分析が試みられた。まず男女両性における異なった社会化は、一般に出生の時点から、生物学的性差とされているものに対する先入見に基づいて、女兒はピンクの、男児はブルーの産着をきせられることで開始される。それに続く乳・幼児期には、男女児に対する異なった触れ方やなだめ方—例えば女兒は親からより多く抱かれ、男児は親に纏いつくことを禁止される—を通して、男児は積極的・自立的行動を、一方女兒は受動的・依存的であることを奨励されることによって、性の分化が鑄込まれていく。

こうした性役割の社会化のエージェントは乳幼児期における両親にとどまらず、あらゆるライフサイクル段階を通じて存在する。幼児期以降のそれは、子ども同士（同輩集団）やマスメディア、さらに初等・中等教育時代から高

等教育時代にかけては教師や教科書（ないし教育カリキュラム）、あるいはカウンセリングや就職指導などである。そして学校教育終了後も女性雑誌・男性雑誌や各種の商品広告に至るまでが、性役割の社会化のエージェントとして機能し、男女の伝統的性役割を強化していることが論じられていった。

そうした性役割の社会化の分析とともに行われた性差別実態の分析は、職業労働の場における性差別の問題を中心に展開された。それは、女性の経験を顕在化させるという女性学の課題にとって、きわめて重要なトピックであった。戦後、平均寿命の延長、出産率の低下、家族規模の縮小といった女性をめぐる著しい状況の変化を背景として、殊に既婚女性の就労の急増によって1950年代頃から大きく変化してきた女性労働者の実情に関する調査・研究が、70年代になって、主にフェミニスト社会学者による女性労働問題・職業問題研究として展開されたのである。

そこでの立脚点は、職業労働の場における性による仕事のタイプ分け (sex typing of jobs) ないし職域・職種・職位のちがいによって女性が男性に比して低賃金の領域に閉じこめられる、いわゆる「職業差別」(occupational segregation) の存在という共通認識であった。例えば、職業世界における格付けの異なる二つの分断されたグループの存在様態と、劣位グループへの女性組込みのメカニズムが分析され、また女性の職業分野が平均的に分散せず、女性の占める割合の高いいわゆる「女性的職業」(female occupation) に集中する傾向にあることが指摘された。すなわち、女性が「二本立ての労働市場」(dual labor market) においてごく限られた職種に集中し、しかもそれらの職種には殆ど女性のみで占められているものが多いことが、統計的に裏づけられていったのである。

そして、女性の構造的低賃金の要因が、いわゆる女性的職業である看護婦や司書といった「準専門職 (semi-profession)」の存在に求められた。すなわち、女性が進出を果たしてきた専門職は、主に看護婦、ソーシャルワーカー、司書、初等・中等教育機関の教員など、いわば女性の“適職”とされてきた準専門職であり、それらは、「女性的職業」というラベリングによって、より

高度な専門化が阻まれてきた分野でもある。一方、医学、法曹、エンジニアリングといった分野の専門職においては、女性の占める割合がきわめて低い。しかも、女性が医学や法曹等の職業に就いている場合にも、例えば医学では産婦人科や小児科といった特定の部門に集中する傾向を示している。こうして専門職女性研究においては、女性が「確立された」専門職から排除されていくメカニズムとその実態が解明されていった<sup>7)</sup>。

こうした第1期の女性学は、長くその研究対象から女性を除外してきた伝統的諸学問の偏向に対する“一次的批判”の段階であったといえる。それらは、女性に関する経験的データを可能な限り収集し、女性の存在を書物のなかに顕在化させることを主眼としていた。いわば、伝統的なアプローチに従いながら女性の社会的貢献の発見に焦点をあて、女性に連累する社会現象をクローズアップすることによって男性偏重の研究を補正し、枠づけし直すことが試みられたのである。つまり男性主導の研究と同じ手法を踏襲し、既存の概念やモデルを女性にも同様に適用し、女性を男性と同じパラダイムで研究の対象に含めることを求めた時期であったといえよう。これは女性がその個別性を主張せず、「男並み」に全体の一部として含められることを求めたこの時期の女性学の要求に導かれている。

この既成理論の応用という側面は、この時期の女性解放運動の研究に顕われている。すなわち、それまでに蓄積されてきた社会運動や集合行動研究の成果によって提供される理論ないし分析用具を用いて、運動のイデオロギー、組織、社会政策へのインパクトなど女性解放運動の諸側面を解明する作業が進められたのであった。

こうした第1段階の女性学には、女性が「解放」に向かって動くべき単一の被抑圧者集団であるとする認識が前提として横たわっている<sup>8)</sup>。したがってフェミニスト歴史学の関心は、第1に女性が抑圧されてきた歴史的起源と過程を分析すること、第2に、その抑圧からの解放に向かってどのような運動と業績が積み上げられてきたのかを明らかにすることにあった。そこでは伝統的な文献史学の方法が用いられ、とくに従来 of 政治史の研究と同一線上

に先のテーマを追う結果、文献史料に残った著名な女性が中心におかれることになり、全体的には中産階級の指導的な女性の思想や集団的な行動がテーマとなった。こうして、主に政治運動や社会改革運動の場で活躍した女性（個人ないし団体）が、主人公として登場することになる<sup>9)</sup>。だがそれらは、伝統的な方法論に従いながらも、政治的権力の所在の変遷を中心とする伝統的歴史考察から外された女性の活動の歴史を研究対象とすることによって、女性の抑圧と解放の歴史を直接理解することを試みるものであった。伝統的に専ら男性の活動を通して研究されてきた社会的運動に女性を包含したことにより、この時期のフェミニスト歴史学は、これらの運動の構造・目標・結果等に関する理解を深め、従来の歴史に関する理解を補正したのである。

このように、既存の学問に広く浸透する女性不在の問題を正面からとりあげたという点で、第1期の女性学は大きな意義をもつものであった。しかし、女性の復権を求めながら従来の学問的枠組みのなかにとどまり、これを実現させる新しい原理や概念設定を行わなかったという点で、限界をもっていった。この限界性が、女性学を第2の段階に向かわせることになる。そして第2期の女性学においては、女性の復権を求める新しい原理ないし概念設定がおこなわれている。

## 2. イギリス女性学の新展開

おもにリベラル派を中心に展開された性役割理論に対する他派からの批判は、すでに70年代前半からおこなわれていたが、70年代後半に入って上述の限界性が明らかになるにつれて、イギリス女性学は、単なる性役割理論批判を超えた第2期へと移行する。すなわち、第1期の女性学では、一連の慣習的・法的制限によって女性の公的領域への進出が阻まれていることが女性の従属性の根源であり、したがって、男女に同等の教育機会や市民権(gender justice)が与えられるべきであるとされた。つまり基本的に、公的領域・私的領域という二分法を前提として、前者への女性の進出が善しとされると同時に、後者の私的領域は“私生活の自由”不可侵の原則からいわば聖

域化されるという構図をもっていた。こうした構図に対して、それは根本的に現体制の維持と男性的価値とを肯定するものであるという批判が、他派から提示され始めるのである。そしてさらに、男女間の不等号の原因と構造について、社会化による「役割」とは相異なる見解が論じられるようになる。またそこでは、女性も男性と並んで全体のなかに統合されるべきであるという第1期における平等要求にかわって、男性と異なる女性の異質性に着目し、男女相互の異質なもの・別個のものとしての対等性や、ときには女性の優越性が強調された。さらに伝統的学問に対する批判も、現象的な女性等閑視の実態にではなく、男性の規範を普遍的な人間の規範(human standard)として女性にも適用しようとする学問のあり方そのものに向けられた。その基底には、女性は独自の歴史をもった存在であり、その研究には男性中心の歴史研究とは異なった概念設定が必要であるという認識が横たわっている。こうした認識にたって、第2期の女性学では、新しい概念の構築や新しい分析法の模索がおこなわれたのである。

まずラディカル・フェミニストは、“性”が政治的含みを帯びた一つの地位カテゴリーであるという立場をとり、1970年にアメリカのケイト・ミレットが呈示した、男性による女性支配（「性の政治」）<sup>10)</sup>をシンボリックに意味する「家父長制」(patriarchy)というキー概念を用いて、女性抑圧の根源を追究していった。すなわち、女性を抑圧するものは、権力・支配・階層制・競争等によって特徴づけられる法的・政治的構造のみならず、特に家族、教会、学界といった社会的・文化的制度にも広く浸透する家父長制的システムである。つまり男女の生殖機能の相違による労働の分業に基づいて、男性が女性の出産・哺育能力を管理し利益を得るという「性階級」が形成され、それが男女に与えられた特権の相違をもたらしたとされる。このフェミニズムの基本姿勢は、男性の生物学的優位（出産する性ではないこと）が女性を彼に依存させ、そのことがあらゆる権力関係の原型となり、権力心理（支配欲）の起源となるというものである。そこでは女性の抑圧があらゆる抑圧構造の根源であるとされ、これがラディカル（＝根本的な）の名の所以でもある。

そこでの主要テーマの一つは、女性の生物学的性が自らの自己認知や公的・私的領域における機能に及ぼす影響の解明であるが、女性の男性への従属を自然なものとなす“natural order”という概念を疑問視し、女性の生物学（特に出産機能）と養育の心理学を女性のパワーを解放する潜在的な源泉としてみなすことによって、ネガティブな生物学的影響の克服が試みられた。

リベラル派と同様、社会通念における男性性・女性性に基づく性差（ジェンダー）は、殆ど社会化と環境の産物であるという見解を採用するが、女性を単に性役割条件づけの犠牲者とみなすりベラル派とは異なり、男性の権力による女性支配を、ジェンダーの社会的構築の源泉とみなしている。そこでは、伝統的な公の政治制度を追究するかわりに、「個人的なことは政治的である」というスローガンのもとに、公的領域よりも私的領域にこそ女性抑圧の根源を求めるべきであることが主張された。すなわち、人間の性と生殖がいかに結婚・強制的異性愛・母性という制度によって管理され、社会化されているかを考究し、公的領域での表面的な平等をめぐる改良や経済システムの変革だけでは、女性抑圧の深層にふれることはないとして、家父長制に代わるまったく新しい社会体制の創造が模索されたのである。そのためには、女性だけの自律的な女性運動ないし分離主義が必要であると考えられ、そして、家父長制的価値の枠組みのなかで等閑に付されてきた“女性文化”を再評価することが試みられた。従ってそれらは時に、女性性の積極的賛美を伴うものであった。つまり女性性そのものに問題があるのではなく、養育性や情感や優しさといった女性的特性に家父長制が賦与した低い地位に問題があるのであり、それから解放されるためには、女性性に対して新しい女性中心(gyno-centric)の意味づけが与えられ、女性性がもはや男性性からの逸脱としてではなく、それ自身の存在価値として理解されるべきであることが主張されたのである。

次いで、ラディカル・フェミニズムの家父長制概念とマルクス主義を結合したマルクス/社会主義フェミニストは、労働と家庭という二つの場における女性の搾取が女性抑圧の複合要因であるとし、資本制と家父長制との分か



ちがたい関係からなる「資本主義的家父長制」からの解放を主張するようになる。そこでは、リベラル派・ラディカル派フェミニズムの双方が、結果的に階級差を隠し革命を遅らせて支配階級に益するという意味でブルジョア・フェミニズムであることが批判された。そして、女性は女性同士だけで団結するのではなく、労働者階級の男性とも長期的な利益を共有していることを認識して、男女が共同で解放を達成すべきことが主張されたのであった。殊にイギリスはマルクス主義フェミニズム発祥の地であり、同派はジュリエット・ミッチェル以来、シーラ・ローバトム、リン・シーガル、アリソン・ジャガーら多くの優れた論者を得て、質の高い分析を次々と発表する重要な勢力でありつづけている。

イギリスの精神分析医で社会主義者のジュリエット・ミッチェルは、つとに1960年代後半から70年代始めにかけて、マルクス/社会主義の立場からラディカル・フェミニズムの理論形成に大きな影響を与えているが、初めてその両者を結合して、マルクス主義フェミニズムを創始したことで知られている。彼女は、女性抑圧の根源を直接経済的要因に求める伝統的マルクス主義の分析を批判する一方、家族イデオロギーという上部構造の果たす役割とその自律性を重要視した<sup>11)</sup>。すなわち、資本主義のもとで家族は経済的役割とイデオロギー的役割とを担っており、いわば家族という一定の社会形態を自然そのものの不可侵の領域のようにみせかけることが、家族イデオロギーの働きである。したがって女性解放のためには、家族の中に永遠の女性の居場所があるというイデオロギーを分解しなければならないことが主張されたのであった。

こうして、「リベラル」・「ラディカル」・「マルクス/社会主義」フェミニストによる議論が拮抗する“ビッグスリー”の時代が到来するが、その分類法はまた、他の多くのフェミニズムを排除する結果につながってきた。さらに、フェミニズムそれ自身におけるステレオタイプ化は、たとえばポルノグラフィや性的暴力の問題を扱えばラディカル派とみなされ、労働市場における女性の問題を追究すれば社会主義派とみなされ、男女両性の平等に関わる法

律の改正や教育の改善を主張すればリベラル派とみなされがちであった。こうした分類を“女性学史”の重要な部分として尊重しながらも、この垣根をこえて、階級や人種や身体障害者等の要素をも含む多様な問題を、より学際的に既存の学問領域の境界を超えて交差させようとする動向が90年代以降に顕著となる。現在イギリスの女性学は、いわば「諸理論の見直しと統合」の時代という第3期の途上にあるといえよう。そしてこの第3期イギリス女性学を特徴づけているのは、女性の反・ステレオタイプ化、および脱・ユーロ・セントリズム西洋中心主義という二つの要素である。

### 3. ビッグスリー 三大理論を超えて

ここで、殊にイギリス女性学の大きな特徴として、フェミニスト理論の数々の脈絡を織り合わせるという作業が、早い段階から社会主義フェミニストによって最も意欲的になされてきたということの特筆するべきであろう。例えばジュリエット・ミッチェルは、女性抑圧の根源について、伝統的マルキストによっては“生産構造”，ラディカル・フェミニストによっては“再生産”や“セクシュアリティ”，リベラル・フェミニストによっては“子どもの社会化”という要素が過度に強調されてきたが、女性解放を達成するためには、これらの諸構造のすべてにおける女性の地位や機能が変えられなければならないと論じている<sup>12)</sup>。また、アリソン・ジャガーは、女性抑圧の無数の形成を相互関連させる試みがこの派に独特のものであると指摘するとともに、「疎外」の総合概念を用いて、個人的には女性の統合の源であるはずの労働や性や家族や友人が、資本制の下では、すべて分裂の原因となることを論じた<sup>13)</sup>。ミッチェルと同様ジャガーは、女性の従属を説明するには複数の説明しかありえないと主張したが、同派のフェミニズムは、女性の生活のすべての局面を統合するという意味と、統一化されたフェミニスト理論を創造するという両方の意味において、女性学の統合を強調してきたのであった。今日では、フェミニズムの様々な見地の間の境界は人工的なものであり、フェミニズムのラベル化は、時代遅れであるという見方が大方のコンセンサスと

なっている。

さて、イギリス女性学の「第3期」への移行を促進した他の大きな要因としては、70年代後半から80年代を通じて展開され80年代後半には女性学の重要なフレームワークとなった「精神分析派フェミニズム」や「ポストモダン・フェミニズム」の影響があげられよう。女性抑圧の根源を、前者は“エディプス・コンプレックス”等に求め、後者は西洋文化に深く根づいている“性支配・ロゴス支配・資本制”の三位一体的な思考と精神のあり方に求めたが、この両派はともに、一貫してフェミニズム各派の類型化と硬直化を斥けてきた。

精神分析派フェミニズムの中心概念は、女性の抑圧の根源がその精神(psyche)に深く埋め込まれているというものであり、フロイトの概念である前エディプス期およびエディプス・コンプレックスが、その分析に援用された。すなわち、前者の段階で、すべての子どもは全能者(omnipotent)とみなされる母親に共存的に密着しているが、その時期はエディプス・コンプレックスの段階をもって終わり、この段階で、男児は父親による去勢不安から逃れるために、最初の愛情対象である母親をあきらめるようになる。そしてイド(本能的衝動)を超自我(社会的意識)に従属させることによって、男児は完全に“文化”に統合され、その父とともに“自然”と“女性”とを支配するようになるが、対照的に去勢不安のない女児は、最初の愛情対象である母から徐々に分離されていき、その結果、文化への統合は不完全なものとなるという。こうして女児は、おもに自分自身のパワーの発現を恐れて<sup>14)</sup>、支配せずに支配される者として文化の周辺や境界に存在するようになる。したがって、エディプス・コンプレックスこそが男性支配や家父長制の源泉なのであり、家父長制について先のラディカル派とは別の解釈を採用すべきことが主張された。例えばこのフェミニズムの重要な論客でもあるジュリエット・ミッチェルは、外的世界の改善なしには、女性の自信を損なっているある種の家父長制的思考から解放されないが、同時に女性の内的世界もまた変質されなければならないことを説いている<sup>15)</sup>。

しかし一方、それらの間には、フロイトにおける生物学的決定論の限界性についての共通理解が存在していた。例えばシェリー・オートナーは、エディプス・コンプレックス概念を用いるにあたって“権威・自律性・普遍性”を男性に賦与し、“愛情・依存性・特殊性”を女性に賦与するフロイト版を認める必要はないとし、父母双方による育児 (dual parenting) や職場への共同参加 (dual participation) が、エディプス・コンプレックスのジェンダー分析における価値 (gender valences) を変えるであろうと論じている<sup>16)</sup>。つまり権威・自律性・普遍性はもはや男性の排他的所有物ではなく、愛情・依存性・特殊性は女性の排地的所有物ではないということが主張されたのである。

次にポストモダン・フェミニズムは、周知のようにジュリア・クリステヴァやリュース・イリガライらを中心にフランスにおいて興隆し、イギリスでは主としてフレンチ・フェミニズムの翻訳あるいは紹介という形で受け入れられた<sup>17)</sup>。しかしこの理論は基本的に西欧文化の自己批判であり、また女性内部の差異性を強調したという点で、イギリス女性学を「第3期」の段階に導いた一つの要因として重要であるといえよう。同派のフェミニズムは、一つの明確なフェミニストの見解を確立するための統合や合意といった試みに伴う「一つの、真の、現実のフェミニスト・ストーリー」の追求は、典型的な“男性的思考”であるとした。すなわち、女性の経験は階級的・人種的・文化的境界を横切って異なっているために、その“総合”は神話にすぎず、単一でない多様なフェミニズムが期待されるべきであり、多くのフェミニスト思想が併存してよいという。つまり、集中化・硬直化・分離化した諸思想を“単一の真理”として結合し変化に柔軟でなくすることを否定することによって、フェミニストは家父長制的なドグマに抗することができるということが主張されたのであった。

さらに、イギリス女性学の第3期への移行を促したもう一つの要因として、“白人中産階級中心”のフェミニズム内部のステレオタイプ化ないし西洋中心主義に対する黒人や労働者階級ワーキング・クラスといったマイノリティからの批判があげ

られよう。すなわち、一概に女性の「抑圧」といっても、それは階級や人種等の違いによって単一のものではない。各社会階層に固有の女性抑圧に関するそれぞれの理解を結合し、解放への戦略を再構築すべきであるという議論がなされ始めたのである。たとえば黒人フェミニストのフェリー・シモンズによれば、“白人中産階級”中心のフェミニズムのなかで黒人女性は概ね「他者」として別個に扱われてきた。しかし白人女性は黒人女性が被るレイシズムを共有しないかわりに、白人であること (whiteness) によって直接・間接に利益をうけてきたはずである。したがって白人女性は、黒人女性との関係における「有利の経験」(experience of advantage) を理論化すべきであり、そのことによって“レイシズム”は、両者を結合し連帯を可能にする要素となりうるのである<sup>18)</sup>。

ビッグスリーの一枚岩的な理論カテゴリーに反対し、フェミニズムの類型化を否とするこうした潮流は、一時 80 年代後半にフェミニズムのうえに深刻なアイデンティティ・クライシスをもたらしたが、この袋小路を抜け出して、イギリスの女性学は、90 年代以降の第 3 期「諸理論の見直しと統合」時代へと移行したのであった。したがってその第 3 期への移行は、階級問題と人種問題とに直面するイギリス社会の実情と、フェミニズム内部の西洋中心主義への内省に即したものであったと云っても過言ではなく、ここに、革新性と柔軟性に裏うちされたイギリス女性学の懐の深さを垣間みることができる。

すなわち、ある一つの抑圧が、他者への別の抑圧に繋がってはならないのであり、それは人種間のみならず、階級や身体障害の有無などによっても同様であるということが、現在のイギリス女性学に共通のモチーフとなっている。そして、フェミニズムは、白人性・中産階級性・（性志向における）ヘテロ性に合致しない女性グループの周辺化をやめるべきであるという共通認識が、そこに横たわっている。さらに、女性個々人の内部においても多重のアイデンティティが存在し、例えば個人の各ライフステージでの状況の変遷や多様な出来事 (issue) への対応が単一のフェミニスト・カテゴリーでは捉

えきれないことも指摘されてきた。

フェミニズムにおいて、差異性と共通性は異性間・同性間の連関をはかる尺度としてこれまで二分法的に両極化されてきたのだが、より包括的なフェミニスト理論を創造するために重要なことは、女性間の差異性と共通性との両方を認め、そして両者をつくりだしているものを分析することであろう。こうして、“difference”が現在のイギリス女性学における最も重要なキーワードとなり、1970-80年代を通じては男女相互の他者としての性差を表わした用語が、「女性間の差異」（人種、階級、性志向、年齢、宗教、民族、身体能力等）を表わすようになりつつある。そこには、“difference”の追求が“alliance”への道筋であるという共通認識があり、そして、この「差異性」と並んで、“identity”および特権(privilege)へのアクセスをめぐる“power”といった術語が、重要なキーワードとなってきた。

もちろん、フェミニストの間には、こうした差異性の過度の強調が、フェミニズムの知的・政治的分裂につながる可能性に対する懸念がないわけではない。しかしながら、もしフェミニズムが女性にとっての、ひいては人間社会にとっての善を追求するものであるとすれば、女性の多様性と差異性を、人間としての共通性に調和させることが、現代フェミニズムの主要な課題の一つであるだろう。

またこれに関連して、最近ではリベラル・フェミニズム内部において、とくに男性的価値観を人間の価値として高く評価する自らの傾向に対する見直しがある。それは、共通の善よりも“個人的”な自由を強調しすぎる傾向、およびジェンダー強調型(gender-specific)のフェミニズムよりもジェンダー中立型(gender-neutral)のヒューマニズムに価値をおく傾向に対する他派からの批判にこたえるものであると同時に、根本的なヒューマニズム(radical humanism)への新たな途を探ろうとする動向のあらわれでもあるといえよう。

一方、それまで個々におこなわれたフェミニズム各派に対する諸批判を、90年代に入って女性学界共同で再検討しようとする新しい動きのなかで、

おもに 80 年代の諸批評におけるいくつかの代表作が認定され多くのアンソロジーが編集され出版されているが<sup>19)</sup>、これらの書物が、大学や成人教育機関の女性学コースにおける必読書として着々とリストアップされていくという、いわば研究と教育との“有機的な共同システム”が確立している。もとよりアメリカを凌ぐほどの盛んな出版活動はイギリス女性学の特徴でもあったが、ヴィラーゴ、ポリティ、ラウトレッジ、ハーベスターといった出版社による良質で意欲的な女性学専門書の刊行は、成人教育および高等教育分野における女性学学習者の層の厚さによって推進されてきたといえよう。

1989 年 3 月には、女性学を若い世代の欲求から遊離させずに息長く根づかせることを目的として、Women's Studies Network (UK) が設立された。その年次大会の成果をもとに続刊される単行本は、いずれも全英各地の女性学コースにおいて、主要なテキストとして用いられている<sup>20)</sup>。

#### 4. 教育の場における女性学

ここで、教育の場に目を転じてみたい。イギリスに女性学の興隆をもたらした重要な要因の一つとして、同国に深く根を下ろしている成人教育の影響の大きさを見のがすことはできない。1970 年代初期、同国で最初に女性学コースの成果をあげたのは、成人教育の分野であった。イギリスの成人教育史は、通信教育団体が成立する 1790 年代にまで遡るが、19 世紀中葉の労働者教育発展期を経て、1873 年にはケンブリッジ大学によって初の大学開放がおこなわれている。その後主に大学構外教育部 (University Extramural Department)、労働者教育協会 (Workers' Educational Association, 略称 WEA)、地方教育局 (Local Education Authorities, 略称 LEA) の三者によって担われてきた同国の成人教育には、学習者が自ら学びたいテーマを要請し、教師とともにカリキュラムを作成するという、古くからの伝統が息づいている。しかし一方、それがもつ個人主義的でリベラルな教育観は、やがて現状補強のテクノクラティックな教育に留まる傾向と中流層化の傾向をまねき、女性学コースは、いわば成人教育における代替モデルとして登場したの

であった<sup>21)</sup>。女性の体験を重視し、教師と学生の対等性に基づく「創る教育」を目指すその基本方針が、本来の成人教育のもつ学習者中心の考え方、革新性、柔軟性と合致し、自己主張 (self-assertiveness) やカウンセリングのコース等も織込まれた多様な女性学コースを飛躍的に発展させる推進力となってきた。いわばアカデミズム内部の伝統的な教育が覆いきれなかった、女性の疑問や悩みや関心に直接応えうるテーマやカリキュラムが、教師と学生との水平的な関係が保たれた創造的な場において提供されたのである。そして殊に白人中産階級以外の女性に主眼が置かれたという点も、前述のイギリス女性学の特徴に通じる一側面として、特筆に値するだろう。

こうした女性学の導入に端を発して、1970年代半ば以降は急速に大学の主要学部内にも、より専門的な女性学コースが設置されるようになる。イギリスの大学における最初の女性学コースは、1973年ランカスター大学で始まったといわれているが、同年ケンブリッジ大学 (Faculty of Social and Political Sciences) にも “Women in Society” コースが開設されている。筆者自身も聴講の機会を得たこのコースは、1995年3月現在、8名の講師によるチェーン・レクチャーとセミナーからなり、講義内容は「変りゆく女性の地位」、「ジェンダーと身体」、「ジェンダーの社会心理学」、「ジェンダーと言語」、「労働におけるジェンダー区分」、「家族・国家・労働市場」など、多岐にわたっている。ただ、ランカスター大学の場合はその後女性学の博士課程が設置されるまでの進展をみたが、ケンブリッジ大学の場合は、社会学のなかの選択科目という発足以来の形にとどまっている。古い伝統を誇る同大学では、あえて女性学を独立科目として分離させず専門領域間の堅固な境界を守ることによって、女性学の周辺化を回避するという戦略がとられているようである。しかしそのなかで、社会科学原論のなかに「ジェンダー/フェミニスト理論」が、エミール・デュルケムやマックス・ウェーバーらの理論と並置されていることは、注目に値するだろう。ちなみに、もう一つの伝統校であるオックスフォード大学の場合、女性学コースを設けるかわりに研究所 (Centre for Cross-Cultural Research on Women) が設置されているが、女



性に適した活動の領域はコミュニティーにあるという主張において、私的〈女性〉領域と公的〈男性〉領域という“19世紀”的な境界を再び引くところの「新保守主義」と批判される“コミュニタリアン”がその活動の中心であるらしく、フェミニストの間での評判はあまり芳しくないようである。ケント大学、ロンドン大学、サセックス大学等が女性学コース開設の先駆であったが、ロンドン大学には1985年に教育・ジェンダー研究センター (Centre for Research on Education and Gender) が設立され、今日に至るまで女性学研究者ネットワークの形成や教員対象の研修機関としての機能も果たしている。

大学(93校)および高等教育カレッジ(57校)を合わせて全英で150校の高等教育機関のうち、現在では70余校に女性学コースがおかれているが、およそ40校には修士課程、さらに前述のランカスターのほか、ヨーク、サセックス、ケント等の8大学には博士課程も併設されている。また、全日制・定時制を問わず多様な形態のコースを提供する高等の総合学校として長く成人教育の担い手であったポリテクニーク(1992年に大学昇格)には、現在のイギリス女性学界の有力メンバーが点在し、それぞれの場で活発な教育・研究活動を展開している。女性学教育の現場では、たとえば英文学でフェミニスト批評や女性作家についてとりあげる従来の方法のほか、複数の講師による学際的アプローチが多く採用されてきた。後者の場合には分野間の差を克服するために、たとえば「女性と表象」「変りゆく女性の経験/地位」といった共通テーマが設けられ、各講師が専門外の分野に関する知識を備えるべく、コース企画の前段階でスタッフのセミナーが重ねられたという。

現在は「マージンからメインストリームへ」という合い言葉のもとに、この四半世紀の蓄積のうえに、さらに厳密で自律的な女性学の創造をめざした諸理論の統合という新しい試みにエネルギーが注がれている。この動向は、専門分野を超えた研究セミナーの積み重ねによる数多くの共同プロジェクトの展開とその成果の旺盛な出版活動にうかがわれるが、それらの内容につい

ては、次稿で詳しく述べることにしたい。

このような共同作業の重視は、アメリカの女性学がどちらかといえば個別的な傾向をもつのと対照的であるように思われる。女性学を制度化された知識体系として確立することをめざす共同作業のなかで、イギリス女性学が今後どのような新しい展開をみせるのか、目の離せないところである。

## 注

- 1) Boxer, M. J., "For and About Women: The Theory and Practice of Women's Studies in the United States." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 7(3), Spring 1982, pp. 661-695: p. 663.
- 2) Friedan, B., *The Feminine Mystique*. New York: Dell, 1963. (邦訳:『新しい女性の創造』三浦富美子訳, 大和書房)
- 3) Mitchell, J., "Women: The Longest Revolution." *New Left Review* 40, November-December 1966, pp. 11-37. 同論文は、初めてマルクス主義理論における性抑圧理論の欠落を指摘したものであるとされている。5年後の1971年に増補され、*Women's Estate* のタイトルでペンギン・オリジナル叢書の1冊として出版された(注9参照)。また同書は翌72年アメリカのパンテオン社からも別装丁で刊行され、アメリカの女性解放運動にも大きな影響を与えた。
- 4) スタンレーとワイズによれば「社会化」とは、子どもたちを、特定の規範と価値を継承しかつ自らに期待されている行動を知る存在に変えていく過程であり、また「性役割の社会化」とは、子どもたちが社会的存在になると同時に「男/女らしい」存在—特定の社会において男女にそれぞれ該当すると思われる属性群・行動群—になる過程のことである。(Stanley, L. and S. Wise, *Breaking Out: Feminist Consciousness and Feminist Research*. London: Routledge & Kegan Paul, 1983).
- 5) Oakley, A., *The Sociology of Housework*. New York: Pantheon Books, 1974, p. 5. (邦訳:『家事の社会学』佐藤和枝・渡辺潤訳, 松籟社)
- 6) Money, J. and A. Ehrhardt, *Man and Woman; Boy and Girl: The Differentiation and Dimorphism of Gender Identity from Conception to Maturity*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1972.
- 7) たとえば, Rapoport, R. and R. N. Rapoport, *Dual Career Families*. Hammonds-worth: Penguin Books, 1971. や, Beynon, H. and R. M. Blackburn, *Perceptions of Work: Variations Within a Factory*. Cambridge: Cambridge University Press, 1972. など.
- 8) Rowbotham, S., *Hidden from History: 300 Years of Women's Oppression and the Fight Against It*. London: Pluto Press, 1973. は、そうした共通認識をよく表わしている。
- 9) たとえば, Goldman, H., *Emma Paterson: She Led Woman into a Man's World*. London: Lawrence and Wishart, 1974.
- 10) Millett, K., *Sexual Politics*. New York: Doubleday, 1970. (邦訳:『性の政治学』藤枝滯子他訳, ドメス出版). 尚, Parker, K. and L. Leghorn, *Woman's*

- Worth: *Sexual Economics and The World of Women*. London: Routledge & Kegan Paul, 1981. は、同派の代表作の一つである。
- 11) Mitchell, J., *Women's Estate*. London: Penguin Books, 1971. (邦訳:『女性論—性と社会主義』佐野健治訳, 合同出版)
  - 12) *Ibid.*
  - 13) Jaggar, A. M., *Feminist Politics and Human Nature*. Totowa, N. J.: Rowman & Allenheld, 1983, pp. 316-317.
  - 14) Dinnerstein, D., *The Mermaid and the Minotaur: Sexual Arrangements and Human Malaise*. New York: Harper Colophon Books, 1977, p. 161.
  - 15) Mitchell, J., *Psychoanalysis and Feminism*. New York: Vintage Books, 1974. (邦訳:『精神分析と女の解放』上田昊訳, 合同出版)
  - 16) Ortner, S. B., "Oedipal Father, Mother's Brother, and the Penis." *Feminist Studies* 2(2-3), 1975, pp. 167-182: p. 179.
  - 17) たとえば, Duchen, C., *Feminism in France: From May '68 to Mitterrand*. London: Routledge & Kegan Paul, 1986. や, Hekman, S. J., *Gender and Knowledge: Elements of a Postmodern Feminism*. London: Polity Press, 1990. など.
  - 18) Simmonds, F. N., "Difference, Power and Knowledge: Black Women in Academia." In Hins, H. et al. (eds.), *Working Out: New Directions for Women's Studies*. London: Falmer Press, 1992, pp. 51-60: p. 55.
  - 19) たとえば, Tong, R., *Feminist Thought: A Comprehensive Introduction*. London: Routledge & Kegan Paul, 1992. や Humm, M.(ed.), *Feminisms: A Reader*. London: Harvester, 1990. など.
  - 20) たとえば, Aaron, J. and S. Walby(eds.), *Out of the Margins: Women's Studies in the Nineties*. London: Falmer Press, 1991. など.
  - 21) Thompson, J. L., *Learning Liberation: Women's Response to Men's Education*. London: Croom Helm, 1983. (邦訳『解放を学ぶ女たち』上杉孝實他訳, 勁草書房)